

『定本與謝野晶子全集』未収録歌考（その二）

——「大阪朝日新聞」等より——

菊池真一

一 「大阪朝日新聞」より

「大阪朝日新聞」に掲載された与謝野晶子の歌は、明治から昭和まで至るものの、数としては二百余に過ぎない。しかし、その中にも『定本與謝野晶子全集』に収録されていない歌を数十見出すことができるので、ここに報告しておきたい。

A 同時掲載数首の全てが『全集』に掲載されていないもの

目開けばいときはやかに雪の山立てる国にて春を迎ふる

（大朝。大正十五年一月一日）

つつましく守屋の嶽の裾山に見なせと並ぶ東海の富士

（大朝。大正十五年一月一日）

朝うれし日の光をばたたへんと山国に來し人ならねども

（大朝。大正十五年一月一日）

信濃路のあけぼのの雲その中に富士も隠けり一月にして

（大朝。大正十五年一月一日）

一隅の鴨浮く水の青きをばわれこそ現け諏訪の花丘

（大朝。大正十五年一月一日）

日昇りぬ乗鞍岳の雲の角深雪の雲の角燃ゆるかな

（大朝。大正十五年一月一日）

雪の山はてなく続き湖青しよきこちす新しき年

（大朝。大正十五年一月一日）

山国の客とて衣を敷しらず重ねて歩く初春の雪

(大朝 大正十五年一月一日)

絵をば描き本を読みつつ初春の旅人達のなすそぞろ言

(大朝 大正十五年一月一日)

降る雪とつながる空を昨日より親しく思ふ初春の櫻

(大朝 大正十五年一月一日)

郷の人早月を待ちて咲くといふ梅を語れば都恋しき

(大朝 大正十五年一月一日)

幽倉を横に見なしてたどる路北信濃より山風ぞ吹く

(大朝 大正十五年一月一日)

飛驒さかひ雪ぐもりして塩尻の桔梗が原の明き一月

(大朝 大正十五年一月一日)

守屋獄白く温泉の霧なびく町のはてなる砥川にいたる

(大朝 大正十五年一月一日)

雪雲の飛驒よりこえて来しゆゑに少し寂しき元日の暮

(大朝 大正十五年一月一日)

早川の力あるさへおほひたる桔梗はらの仙石平

(大朝 大正十五年一月三十一日朝刊)

月影もあやふき山の路踏まず儀右衛門の廻廊による

(大朝 大正十五年一月三十一日朝刊)

足柄の山ふところの夕風も烈しきことの恋に變らず

(大朝 大正十五年一月三十一日朝刊)

地獄谷白き煙はことわりのまゝに御空とあはひはるけし

(大朝 大正十五年一月三十一日朝刊)

村の灯は恥づるが如く杉を置き深きころに瞬きぞする

(大朝 大正十五年一月三十一日朝刊)

ほの白し箱根のはての仙石の下湯の霧かのこる薄か

(大朝 大正十五年一月三十一日朝刊)

人間と山と日かげの親めるところなれども嵐湧き立つ

(大朝 大正十五年一月三十一日朝刊)

淡くしていとおもしろし仙石の長尾に及ぶ広き月明

(大朝 大正十五年一月三十一日朝刊)

雪の止み姥子の林ほのかなる富士を上にす岩湯出づれば

(大朝 大正十五年一月三十一日朝刊)

わがとるは姥子の方へ分れたる萱山つたふ溝に似る路

(大朝 大正十五年一月三十一日朝刊)

早川の芥の堰を鶴鶴のあやふげに踏ふ百尺の下

(大朝 大正十五年一月三十一日朝刊)

山の空屋まばらなり泉さへ人間の灯に媚びてひろがる

(大朝 大正十五年一月三十一日朝刊)

日おつれば水の響きにけおされて人の愁ひを作る家かな

(大朝。大正十五年一月三十一日朝刊)

黄金の毛の日光も飼はれたり湖水のとなりあしがらの牧

(大朝。大正十五年一月三十一日朝刊)

灰はみて芽立ち雑木の茂れるは薄に似れどなまめかしけれ

(大朝。大正十五年一月三十一日朝刊)

速かに上の空をば走る雲山にて見ればさびしわりなし

(大朝。大正十五年一月三十一日朝刊)

麓なる温泉村に遊ぶこと昨日も言ぐさにする

(大朝。大正十五年一月三十一日朝刊)

ありし年地震に捲かれし木賀の里再びなりぬ古木混りに

(大朝。大正十五年一月三十一日朝刊)

朝の目が除ける雪の跡見れば海の藻よりも青し山肌

(大朝。大正十五年一月三十一日朝刊)

忍びつゝ霧這ひわたれ目没に近きしるしの仙石の原

(大朝。大正十五年一月三十一日朝刊)

B 同時掲載数首のうち、幾つかは『全集』に掲載されておらず、その他の幾つかは掲載されていても「大阪朝日新聞」

にある旨注記がないもの

この日より春を襲めましはしけやしわれに響へて君に響へて

(大朝。大正六年一月一日)

石清水八幡の山の薄雪を船して愛でむ春のはじめに

(大朝。大正六年一月一日)

据ゑられて春のもちひは大海の真白き船を見ゆるなりけり

(大朝。大正六年一月一日)

門々の松をさなげに清ければ正月の街よろこぶわれは

(大朝。大正六年一月一日)

元日や春寒と云ふ言葉など子に教ふれば獅子舞の来ぬ

(大朝。大正六年一月一日)

十人程続き来ませる客人も主人もいみじ正月の家

(大朝。大正六年一月一日)

春立ちぬ大阪の街京の山塚の浜のうちまじり見ゆ

(大朝。大正七年一月十三日夕刊)

息をわれほとつく時にほと吹きぬ青磁の色の初春の風

(大朝。大正七年一月十三日夕刊)

正月はいまだ冬なりあなわりな春に涙の落つるべしやは

(大朝。大正七年一月十三日夕刊)

日を見ればよろこび多く生れ来る身を祝ふなり春の初めに

(大朝。大正八年一月二日)

表町羽子鳴り止めば裏町に仄立ち初むる羽子の音かな

(大朝。大正八年一月二日)

春來れば桃色の糸われを巻く美しかれと恋を思へと

(大朝。大正八年一月二日)

時に來て書齋を覗く末の子の足音に似る春の雪かな

(大朝。大正八年一月二日)

日の射せば椿の色のくれなるを被くと見ゆる雪の山かな

(大朝。大正八年一月二日)

C その他、『定本與謝野晶子全集』には掲載されているものの、初出注記が全くなく、「大阪朝日新聞」を注記すべきもの

めてたかるわかもゝとせの中頃に四十日ありけるしろき船室

(大朝。大正元年十一月三日)

春立つとはやく緑の草しげる心は少し軽きなるべし

(大朝。大正六年一月一日)

來し春の匂つくりてわが小琴青き袋を脱ぎにけるかな

(大朝。大正六年一月一日)

美しくしいみじきものが地を占めて天にをさをさ劣らず春は

春立てば浪華の街の少女達昔おとゞひと見え給ふかな

(大朝。大正六年一月二日)

爐と居れば遠方人の恋しけれ正月ながら昨日のごとく

(大朝。大正六年一月一日)

わが庭はまださへづらぬ小鳥ども起居するなり元日にして

(大朝。大正六年一月一日)

街々のかほよき群に入りまじり風流男さびし春を遊べる

(大朝。大正六年一月一日)

わが住める山の続きに何ごとかあるこゝちする元日の朝

(大朝。大正六年一月一日)

たちまちに今年の春の初めともなりぬることを驚かぬかな

(大朝。大正六年一月一日)

春と云ふめでたき白き噴泉はいづくにか湧く白らに湧く

(大朝。大正七年一月十三日夕刊)

ささやかに松立てられて小ゆるぎの磯の船めくわが湯殿かな

(大朝。大正七年一月十三日夕刊)

春立ちぬまた今日のち仰がんと庄へられむもかの青き空

(大朝。大正七年一月十三日夕刊)

正月に紫着ればこゝろや、重くしめるもならひとなりぬ

(大朝。大正七年一月十三日夕刊)

正月はよけれどわれはわれなれば吐息のつかるあなおぼつかな

(大朝。大正七年一月十三日夕刊)

ある利那ふためきて降りある利那のどかに降れる春のしら雪

(大朝。大正七年一月十三日夕刊)

正月のうらなつかしさ自らの身の淋しさを街に覚ゆる

(大朝。大正七年一月十三日夕刊)

元日も二日も同じ爐のほとり君がかたへに春をことほぐ

(大朝。大正七年一月十三日夕刊)

裏白の山ぐさの葉を懸けたれば柱もものを云ふこゝちする

(大朝。大正七年一月十三日夕刊)

青やかに松立つ街のめでたさよ白馬に乗れる初春の風

(大朝。大正八年一月二日)

人の子の解くべき謎も皆解けし日かと覚ゆる元日の昼

(大朝。大正八年一月二日)

白き羽心のあがるさまに舞ふ少女子達の集へる街に

(大朝。大正八年一月二日)

君とわれ更にあはひの近づくこと正月の夜は思ひこそすれ

(大朝。大正八年一月二日)

何ことに心の足るか知らねどもこちたく香をば散らす梅かな

(大朝。大正八年一月二日)

二 『文章倶楽部』より

『文章倶楽部』には与謝野晶子の歌が六十首余見られるが、その中の一首は「全集」で確認することのできないものである。

初夏の雨の世界に身を置くもふさはしきかな惱ましくして

〔『文章倶楽部』第九卷第七号。大正十三年七月一日〕

三 『国民附録』より

「国民新聞」の付録である『国民附録』の大正十四年九月号と十二月号の表紙に晶子の歌が見られるが、ともに全集には掲載されていない。(後者は吉沢英明氏御所蔵。前者は吉沢英明氏よりいただいたもの)この年の他の月にもあるはずだが、現物を確認することが未だできない。別の年については全く不明である。

子はしばしめでし鬪を捨てて去る大人にならばかくせぬものぞ

〔国民附録〕大正十四年九月号。

大正十四年八月二十日発行

夕風や稲の足穂の美しくしき上にも舞へりみちのくの霧

〔国民附録〕大正十四年十二月号。

大正十四年十一月二十日発行

【付記】前号の訂正。「甲南国文」第44号163ページ下段に掲げた「頬に寒き……」の歌は、「舞姫」にあり、初出は「明星」明治38年12月号。太田登先生から御教示を賜った。